
勇ましき者

come猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇ましき者

【Nコード】

N0788X

【作者名】

come猫

【あらすじ】

目が覚めると、見知らぬおっさんたちに囲まれていた！ 仕方なく二度寝すると、次は美女が目の前に！ これは、ふざけた勇者のおかしな短編物語です。

『夢であってほしい現実』（前書き）

力不足が目立ちますが、良ければ見てください。と、感想もお願い
したいです。

『夢であってほしい現実』

これは、ある世界の悪魔を討つべく、ある小さな国に召喚されてしまった勇者の物語である。

おれは低反発ベッドに低反発ウレタンの枕を抱え眠っていた。そして

目が覚めると、知らない人たちに囲まれていた。

「おお、勇者様が目覚めたぞ！」

二度寝決定！

「おお！？ また眠りにつかれたぞ……」

目が覚めると、綺麗な人が目の前に。

コレだよ、これこれ。夢ってのは、むさくるしい貧相なジジイやおっさんに囲まれているようなものじゃなくて、本人が満足しないよね。

「お起きになりましたか？」

「ええ、あなたは？」

そついいながら起き上がり、ベッドに腰掛けていた綺麗なお姉様の左手を握る。

「あ、あの、この国の王女を努めさせて頂いております。シーラル・ミソラ・クートと申します」

「王女、か……。いいですね」

小さく呟き、右手を肩に掛ける。吐息がかかりそうなほど近づく。

「あの、あの！ ゆ、勇者さまのおにゃ！ ……お名前はなんと言うのでしょうか……」

か、噛んだ……だと！？ 可愛い。普通に可愛い。

「んで、おれは勇者、か……。森羅です。シンラ」

「シンラ、さまですか……。！ いいお名前ですねっ！」

そう言っつて両手を口元に上げる。自然に肩の手と握っていた手をはずされた。

「シンラでいいよ。えー……。っと、シーラル？」

「こりゃ！ 様をつけんか！」

いままで黙っつて震えながらこちらを睨みつけていた、いかにも裕福そうな、サンタクロースみたいなおじさんが急に大声を出した。うるせ。

「は？ お前誰だよ？」

「あなた、シンラに失礼ですわよ？ あ、シンラ？ 私のことはミソラで結構ですよ」

怒った顔をしたかと思っつたら、急に笑顔になる。ギャップというやつか……！

おれの夢にしてはよくやるな。

「ありがと、ミソラ。そこのおっさんも引き立て役ご苦労……。っ
て待てミソラ」

「はい、なんでしよう？」

「さつき、『あなた』っていった……。？」

「ええ、私の夫ですから」

「このおっさんが？」

「おい、貴様！ しつれ「ええ、一応王様ですよ」
にこやかに答える。

「おい、王」

「な、なんだ急に」

おれはえらく冷めた目で

「死ね……。今すぐ！」

「コイツを牢獄へぶち込めえー！」

掛け声と共に、どこからともなく武装したおっさんたちが。

「あ？ 勇者にそんなことして良いと思ってるの？ なあ、兵士の方々！ 今この世界に必要なのは、救世主の勇者様が、それとも、老いぼれた傲慢ジジイか。判断しろ！」

「わーい、シンラかつこいいー」

王女がおれの味方についたことで、形勢逆転。

王様は、自分が呼んだ兵に連れられ牢獄行き。

「ふ、おれに逆らった罰よ……！」

てか、この夢長いなー。

「なあ、ミソラ。俺の頬を叩いてくれないか？」

「？ こう、ですか？」

セリフには似つかわしくない素敵なピンタをいただいた。

「いってえ……！ しかも、目覚めない、となると」

「だ、大丈夫でございますか……？」

目をうるうるさせながらおれの顔を覗き込んでくるので、思わず

チユ。

「んっ……シ、シンラ、様？」

「……あー、ごめん。つい」

「ま、まあ、いいです……。私も頬を叩いてしまいましたっ」

ニコツ、と笑顔を向けてくれた。優しいし可愛い。

「と、聞きたいことがあるんだっ」

「はい、お答えできることなら何でも」

「おれがどうやってここに来たか、わかる？」

「ええ、この国の魔導師たちを集めまして、召喚、させていただいたのでございます」

「はあ」

「ですから、シンラはこの世界の人間ではないですし、夢、でもございません」

「やっぱり、ですか……」

「そして、今この世界を支配しようとして企んでいる悪魔『トビ小僧』を倒していただきたいのです」

「ああ、やっぱそういう展開……って、『トビ小僧』?」

「はい、私たちはそう呼んでいます……。隣国では魔王と言われるものですね」

「あ、そうですか」

「では、旅立ちの道具を王様……はいないので、代わりに私が授けます」

「はいはい、ありがとうございます」

てか、帰れるのかな。断りはしないけどさ。王女可愛いし。

「勇者証明書と、20ギル、『どのナイフ』です」

「……スルーで」

ツッコミどころが多すぎるぜ!

「では、まずはここから南にある『地獄の村』を目指すといいでしょう。旅のご無事をお祈りしております。詳しい事は、そちらにいる大臣より聞いてください」

「へーい。じゃ、行くか。ミソラも行くぞ」

「……へ?」

仲間一人目、王女ミソラ。

『可愛い子には背引きをせよ』

く地獄村く

「ここが地獄村か……。名前の割には普通だな」
木作りの門をくぐり、村の中を見渡す。

「ええ、ですが、良い物がよく集まる場所だと聞きます。旅立ちにはうってつけの村ですね」

テンプレだな。

「この村は店の数が多いな……。ミソラ、まずは武器屋を回ってみよう。安くて良い物があるかもしれないし」

「わかりました」

屋台のように並ぶ店通りにおれ達は向かった。

「やっぱり20ギルじゃ買える武器はないな……。ミソラ、お金持っていないの〜？」

「ええ、王女といえどあまり裕福な国ではないものですから……。ごめんなさい、ミソラ……」

まあ、確かにあんな王が自治する国だ。政治を巧くできるとも思えなかったし……。

「いいよ、気にしないで。ミソラのせいじゃないし」
「すみません……」

泣きそうな上目遣い。……襲っていいんでしょうか。
理性が飛びそうになった瞬間、後ろから声をかけられた。

「あの、お二人さん！ 旅人でございますか？」

小さな女の子。略して少女。がこちらを見上げていた。

「いえ、私は王」「うん、そっだよお嬢ちゃん」

ミソラを遮り、特別な子供用スマイル。

「で、ではうちの店に来ませんか……？ 良いものそろってます！」
満面の笑顔は警戒を解き、営業モードに入ったのだろうか。その姿は可愛く、つい

「ああ、連れて行ってもらおうかな」

お金もないのね。

「はいっ！ こっちです！」

「あらあら、走ると危ないわよ」

ミソラは手をひかれ、一緒に走っていった。その後ろを

「お金、どうにかしないとなあー……。ていうか、道中魔物も襲ってこないし、どうやって金を稼ぐんだよ……」

勇者がぶつぶつ言いながら、トボトボとついていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0788x/>

勇ましき者

2011年9月27日13時26分発行